

研究ノート

ニューヒロイン、玉鬘登場をめぐる

The appearance of the new heroine Tamakazura

伊勢 光*

Hikaru ISE

キーワード：玉鬘、キャラクター、主題の引継ぎ、末摘花、藤壺

Key Words : Tamakazura, character, Continuation of the theme, Suetumuhana, Fujitubo

要約

『源氏物語』は長編化していく過程で、唐突に話頭を転じて新たな人物を登場させることがある。そうすることでこの物語は新たなテーマを発見し、問題を深化させていくのである。そうした事象は宇治八の宮、浮舟などを登場させた特に第三部において顕著であるのだが、それらの先蹤として第一部の玉鬘がいるのではないか。

と言うのも「玉鬘」巻の冒頭は、前巻「少女」巻とは直接つながらず、いかにも唐突である。物語の「根幹」から言えば、脇道に逸れたような印象を受ける。だが、その冒頭を読んでいくと、これまでの物語を思い返させるような表現がちりばめられているのだ。

それらの表現は、これまで登場した様々なヒロインを想起させるものでもある。具体的には玉鬘の亡き母である夕顔、そして末摘花、さらには引き歌表現を通して藤壺の存在が透けて見える。そうしたこれまでの物語なりヒロインなりを思わせる表現から「玉鬘」巻は始発し、それは玉鬘というニューヒロイン登場の布石になっているのだ。

そして、物語はこれまでのヒロインを想起させることを通して、これまでの展開と玉鬘の物語の接続、融合を図ろうとしている。これまでの女君たちとの恋愛、そして彼女たちが光源氏にもたらしたものを玉鬘に引き継がせて、物語は新たな展開（光源氏の老い、光源氏世界の相対化）を開拓していくのである。

Abstract

As The Tale of Genji grows in length, the story sometimes undergoes sudden changes

* 東海学園大学人文学部人文学科

and new characters are introduced. In doing so, this work rediscovers themes and deepens the issues. This phenomenon is particularly evident in the third part, where characters such as Uji hatino Miya and Ukifune appear, but Tamakazura, who appears in the first part, may be a precursor to these characters.

The opening of the “Tamakazura” chapter is quite abrupt, as it does not directly connect to the previous volume, “Shojo” chapter. From the perspective of the “core” of the story, it gives the impression of deviating from the main story. However, as one reads the opening, one finds that it is peppered with expressions that recall the story up to that point.

These expressions also recall various heroines who have appeared in the story so far, such as Tamakazura’s late mother, Yugao, and Suetsumuhana, and Fujitsubo’s presence can also be seen through the use of the quote song. The “Tamakazura” chapter begins with expressions that evoke previous stories and heroines, which lay the groundwork for the appearance of the new heroine, Tamakazura.

And by recalling previous heroines, the story attempts to connect and fuse the previous developments with Tamakazura’s story. By having Tamakazura take over Hikarugenji’s love affairs with the previous ladies and what they have brought to him, the story opens up new developments (Hikarugenji’s aging and the relativization of his world).

はじめに

「玉鬘」巻は唐突に始まる、そう言っても過言ではないだろう。

直前の巻「少女」では光源氏の息子である夕霧が無事に侍従となり、出世の階梯を登り始めるとともに、光源氏自身も大邸宅六条院を造営し、さらに栄華を極めていくことが描かれる。とするならば、彼らの栄耀栄華がその頂点（具体的には「藤裏葉」巻における夕霧の結婚と中納言昇進、光源氏の「太上天皇になずらふ位」（「藤裏葉」⑤108頁）の取得）に達するまでを見届けるのが、まずは物語の流れであり、それがいわばスマートな展開であると言えるのではないか。

しかし、『源氏物語』はそこで脇道に逸れる。いわば「新キャラクター」とでも言うべき女君、玉鬘を登場させるのである。かつて武田宗俊は、「玉鬘系」と「紫の上系」の物語という二グループを想定し、「玉鬘系」の物語は「紫の上系」の物語が書かれた後で書かれ、その後に時系列に合うように適宜挿入されたと論じた⁽¹⁾。

池田和臣が言うように武田説そのものはいまや全く否定されていると言ってよい⁽²⁾。しかし、武田の発想がすべて間違っていたとは筆者には到底思えない。「玉鬘」から「真木柱」までの十帖（いわゆる「玉鬘十帖」）は、物語の「根幹」（武田の言い方を借りれば「紫の上系」）からは脇道

に逸れるのである。『源氏物語』が「根幹」と「枝葉」をうまく絡めながら重厚な世界観の物語を形成しているということを武田は明らかにしたのではない。

本稿は「玉鬘」巻冒頭に、「根幹」（栄耀栄華を描く）と「枝葉」の融合を図った物語の工夫を見たいと思うものである。あるいは武田が言うように本当に「藤裏葉」巻までを既に書いた作者の手に成るものかもしれない。

なお、この考え方自体は、新しいものではない。すでに池田は「玉鬘十帖は紫の上系と玉鬘系の融合したものととらえるのが妥当」⁽³⁾と指摘している。そこで本稿ではその「融合」のなかで、新しい試みとしてニューヒロイン玉鬘が造型されたのではないかと述べてみたいのである。

この問題は『源氏物語』のみにとどまるものではない。

現在もなお、物語（小説、漫画など）が長編化していく過程で、物語は新たな登場人物を生みだして物語世界を拡大化、活性化させていくことがある。そのはしりとして『源氏物語』があるのではない。最大の例が宇治十帖における宇治八の宮、あるいは浮舟である。彼らが『源氏物語』執筆当初の構想にはなかっただろうことは、これまでも様々なかたちで指摘されてきた。『源氏物語』は新たな登場人物を生み出すことで、物語を長編化し、さらなる金脈（テーマ、問題）を掘り進めようとしてきた物語なのであった。

玉鬘が物語執筆当初の構想になかったか、そこまでは分からない。けれども、武田の言う通り、光源氏父子の栄耀栄華を書き終えた作者が何か書き残したのを感じ、それを補うべく玉鬘というニューヒロインに担わせて、一旦前に戻って書いたということは十分あり得えよう（同じく後に進んで書いたのが「若菜上」巻以降の、光源氏転落の物語ということになる）。そうすることで『源氏物語』はさらなる深み、さらなる厚み、またはさらなる問題意識を持つことが可能となったのである。

そうした「物語世界の拡大化、活性化」を企図した「新キャラクター」。そんな玉鬘の造形を「玉鬘」巻の特に冒頭から見ていきたい。

本文の引用とページ数は岩波文庫版『源氏物語 一～九』（岩波書店 2017～2022）に拠る。

1. 光源氏の未練を引き継ぐ女君 ——夕顔を想起させる冒頭表現

まずは「玉鬘」巻の冒頭を挙げる。

年月隔たりぬれど、飽かざりし夕顔を露忘れ給はず、心心なる人のありさまどもを見給ひ重ぬるにつけても、あらましかばと、あはれにくちをしくのみおほし出づ。

（「玉鬘」④ 16頁）

下線「飽かざりし夕顔」とあり、まずは光源氏が亡き夕顔のことを全く忘れていないことが語られる起筆になっている。光源氏はかつてその恋愛の絶頂のさなかに失った恋人、夕顔の影を断ち切ることができていない。「露」というのは全くというほどの意味であり、その未練の強さが分かる。源氏は、今なお夕顔の影に強くとらわれているのであった。

この胸中の耐えかねる思いはいったいどのように処理されていくのか。物語は再度この問題を俎上にあげんとする。つまり、この巻に新たなヒロインが登場し、自然、この問題を担って光源氏を虜にしていくという流れが冒頭で用意されたのだ。

着目すべきは二重傍線「あらましかば」である。文法用語で言うところの「反実仮想」の構文、つまりもう一つのあり得たかもしれない世界を夢想する光源氏がここで語られているということになる。「夕顔」巻で途絶した（生きることのできなかつた）人生を再び生き直したい、もし夕顔が生きていたら……と、果たせなかつた恋を今なお反芻し、想像せずにはいられない男の未練が切々と語られているのである。

そして、この男の未練こそが新たなヒロイン、「新キャラクター」の導入を喚起するのであろう。つとに日向一雅は「玉鬘は夕顔の忘れ形見として、源氏の夕顔に対する尽きることのない哀惜や償いの念によって呼び出されてくる」と述べた⁽⁴⁾が、まさにこの意味で深くうなずかされる。夕顔を待ちわびるのはもはや光源氏だけではない。読者の期待も掻き立てるような、そのような思わせぶりな書き出しと言えよう。夕顔の造形、夕顔の物語を背負った、ニューヒロインの登場が待たれることになるのである。

2. 光源氏世界の相対化を引き継ぐ女君 —— 末摘花を想起させる冒頭表現

ところで、光源氏が夕顔を想起するのは今回の「玉鬘」巻が最初ではなかつた。

思へどもなほ飽かざりし夕顔の露におくれし心地を、年月経れどおぼし忘れず……

（「末摘花」① 500 頁）

上に引いたのは「末摘花」巻冒頭だが、「玉鬘」巻冒頭が、この「末摘花」巻を承けるものであることは言葉の一致を見ればもはや自明であろう。

【年月】が経っても光源氏は【飽かざりし夕顔】を全く【忘れ】ることができなかつたという。それら【】でくくった語の一致にくわえて「玉鬘」巻で「全く」の意味で使われている【露】が「末摘花」巻では「はかないもの」の象徴として用いられるという意味の「ずらし」、ある種の言語遊戯もなされている。そのことは畢竟「玉鬘」巻が「末摘花」巻を意識して書かれている証拠と言えらるだろう。

この点について「玉鬘」巻の『岩波文庫』の頭注に「夕顔追慕から語り出す□末摘花冒頭と酷似する」(17頁)という指摘があり、ひとまず異論はないが、しかし「酷似する」などと言って済ませられるレベルだろうか。意図的な重ね合わせとしか言いようがないのではあるまいか。

それではいったい「末摘花」巻とはどういう巻で、また末摘花とはいったいどのような女性であっただろうか。

長谷川政春は「末摘花」巻について「鼻の赤い醜女が「をこ物語」風に強調される」⁽⁵⁾物語とまとめる。ひとまず妥当な見解と思われるが、さらに「末摘花が「かぐや姫の物語」などをひもといて、さびしさをまぎらしていた姫君であった」という指摘をしているのは非常に興味深いところである。

つまり、「末摘花」巻は「をこ物語」なる滑稽譚であるのだが、一方で末摘花自身はこれまでの「物語」を日ごろから読み込み、ある程度物語について知悉している女君なのである。彼女を語るなかでは「かぐや姫の物語」というように物語が実名で登場するわけで、そうした物語と『源氏物語』がどう違ってくるのか比較、相対化される機運が醸成されましょう。

実は末摘花をそのような光源氏世界を相対化する存在として捉えるのは、筆者だけではない。すでに原岡文子が以下のように述べている。

末摘花はその靈性、靈性に溢れる在り方によって、光源氏を守護するものであると同時に、まさにその靈性により光源氏世界への組み込みを拒む存在であった。父の靈に護られたその人のあるひとときの古風な輝きを蓬生の巻に語ることで、光源氏の世界、その美意識の相対化が図られる側面を確認しておきたいと思う⁽⁶⁾。

「父の靈」による「古風な輝き」⁽⁷⁾を強調する原岡と筆者の立場は多少違うが、いずれにせよ末摘花は「光源氏世界への組み込みを拒む存在」であり、彼女によって「光源氏の世界」、言い換えれば『源氏物語』の相対化が図られていくのである。

末摘花のそうした特異な力に着目するのは原岡だけではない。太田善之は末摘花を「シャーマン」だと指摘する⁽⁸⁾。さらに、末摘花の成長が「古歌・古物語を読むという行為」で促されたと述べる。彼女の成長に関しても「物語を読む」ということの重要性が述べられていることは、末摘花という人物を考えるうえで見逃せまい。

「物語」を読み、成長し、ついには光源氏世界を相対化してしまうような女君。その末摘花を想起させる形で、「玉鬘」巻は語り出されてくる。おそらく、これから語られる物語は「物語」の効用を語ると同時に、光源氏世界をさらに相対化していくようなものになるのであろう。

付言すれば末摘花という女君は、非常に身体描写がはっきりとなされる女君であった。吉井美弥子は次のように述べる。

光源氏と深い関わりを持った他のどの女性よりも「身体」についての描写が具体的であり、いわば性的にさえ描かれる末摘花は、またどの女性よりも光源氏との関係が深まることのない女君であり、またそれゆえに光源氏自身に限界を突きつける危険な存在であったのだ⁽⁹⁾。

この末摘花を想起させる冒頭を持つということは、あるいは今度の「新キャラクター」も身体描写が（性的なほどに）詳しい姫君であろうという推測が成り立つ。つまり、末摘花を通して試された、「女の肉体（肌ざわりなど）が男の行動にどう直結するのか」という（貴族文学には珍しい）ある種「動物的」な恋を描く試みが継続するということである。末摘花の容貌描写、肉体描写の出色ぶりは論を俟たない。その特質が「新キャラクター」にも引き継がれるのではないかと期待させる書き出しであると言えよう。

かくして夕顔にくわえて、そうした末摘花的な要素も「新キャラクター」は担うだろうことが予想されてくる。読者の「新キャラクター」への期待はさらに膨らんでいくのである。

実際、そうして生み出された玉鬘は、身体描写が克明、かつ性的になされる姫君なのであった。ひとつ具体例をあげる。

むつかしと思ひてうつぶし給へるさまいみじうなつかしう、手つきのつぶつぶと肥え給へる身なり、肌つきのこまやかにうつくしげなるに、中々なるもの思ひ添ふこちしたまて、けふは少し思ふこと聞こえ知らせ給ひける。女は、心うくいかにせむとおぼえて……（「胡蝶」④ 208 頁）

健康的にふっくらと肉付いた玉鬘のうら若き肉体、さらにその肌のきめは細やかで魅力的であった。源氏はその性的魅力に抗しきれず、ついに「思ふこと」（思慕の念）を彼女に告白してしまふに至る。まさに末摘花で組上に上った「女の身体がどう男に影響するか」の（180度美醜を逆転させての）掘り起こしであろう。

つまり末摘花同様、玉鬘もまた光源氏の限界を際立たせている。「むつかしと思ひ」、「心うくいかにせむ」とひたすら困惑に沈み、（あえて今風に言えば）光源氏の「加害者性」すら浮き彫りにしているのである。

「末摘花」巻では示唆されるにとどまっていた源氏の限界性は、「新キャラクター」玉鬘によって本格的に加速していくことになる。

3. 光源氏の内面の物語を引き継ぐ女君 —— 藤壺を想起させる冒頭表現

再度、別の観点から「玉鬘」巻の冒頭を読み直してみたい。

年月隔たりぬれど、飽かざりし夕顔を露忘れ給はず、心心なる人のありさまどもを見給ひ重ぬるにつけても、あらましかばと、あはれにくちをしくのみおほし出づ。

（「玉鬘」④ 16 頁）

下線部「あらましかば」については、先ほども夕顔が生きている「もう一つの世界」を仮想せずにはおれない光源氏の心境を見た。しかし、実はこの箇所では明かされているのは夕顔懐古だけではないことが、ここに「引き歌」を想定することによって見えてくる。

古く『河海抄』は、藤原為頼の以下の歌を「引き歌」とする。

世の中にあらましかばと思ふ人亡きが多くもなりにけるかな（『拾遺集』 哀傷）

この説は、最近の『新編全集』『岩波文庫』にも引き継がれて⁽¹⁰⁾、この歌を参照しながら読むことは通説となっていると思しい。「あらましかば」という語を持つ『源氏物語』以前の歌はこの為頼のものしかない以上は、それも当然の措置であるとは言えるのだが、しかしそう簡単に「引き歌」と認定していいものか。「引き歌」であるならば、本歌のテーマなり他の語句なりが物語の読解に響いてこなければならぬ。「引き歌」の意義とはそこにあるからである。

本歌の場合、テーマとなる語句（そして『源氏物語』が受け継いだ語句）は「亡きが多くもなりにける」であろう。詠み手は単純に一人の愛しい人を喪ったというわけではない。大事な人が「多く」亡くなってしまふ悲しみ、いわば生き続けることの悲哀をこの歌は詠んでいると思われる。

とすれば、この歌を本歌と認定する以上は、この「あらましかば」から大切な人を多く喪ってきた源氏の悲哀を読み取るということになる。それが、為頼歌を透かして物語を読むということだ。つまり、想起されてくる「あらましかば」と思った対象は夕顔一人ということではない。具体的には葵の上、そして藤壺といった今は「亡き」女性たち——（桐壺更衣の記憶は源氏にはないはずなのでひとまず措く）。彼女たちの面影が源氏の脳裏に浮かんだということになる。

こう考えれば、やはり為頼の歌は「引き歌」ということで全く問題はない。『拾遺集』所収歌は当時の（『源氏』を読むほどの）貴族であれば思い浮かんで当然のものであり、こうした亡くした者の多さに沈む光源氏像は、むしろ物語が新たな展開を迎える「玉鬘」巻にふさわしいものであるからだ。

物語の流れを考えれば、先に述べたように直前の「少女」巻は夕霧の元服、出世、恋愛（と六

条院の造営)を語っており、これは「光源氏父子の栄耀栄華」を描く上で本筋の展開ではある。だが、「光源氏の物語」という点から見れば「少女」巻は、夕霧の活躍に比べて光源氏の描写、特に内面描写は一步下がった雰囲気がなくもない。つまり、「玉鬘」巻は光源氏父子の栄耀栄華を描くという観点からは脇道に逸れているのだが、むしろ光源氏の(内面の)物語を描く点では、前々巻「朝顔」巻からの接続が図られているのであった。

では「朝顔」巻はどういう巻だったのか。特に後半は藤壺追慕に浸る源氏の内面を描く巻と言っても過言ではない。源氏は今なお元氣な源典侍と再会し、亡き藤壺を思い出す。

入道の宮などの御齡よ、あさましとのみおほさるゝ世に、年のほど身の残り少なげさに、心ばへなどもものはかなく見えし人の生きとまりて、のどやかにおこなひをもうちして過ぐしけるは、猶すべて定めなき世なり、とおほすに…… (「朝顔」③386頁)

思慮が浅そうな源典侍は生き残っているのに、藤壺は若くして亡くなってしまった。そんなこの世の不定さ、不条理さに源氏は思いをいたす。そこから源氏は綿々と藤壺について考え続け、ついには紫の上に藤壺への想いを吐露するまでになる。

極めつきは、巻の終幕に置かれた源氏の詠歌である。

亡き人を慕ふ心にまかせても影見ぬみつの瀬にやまどはむ
とおほすぞうかりけるとや。 (「朝顔」③410頁)

「亡き人」藤壺を慕う源氏の心中が克明に描き出されている。藤壺が正編世界の中心テーマ(罪、恋、皇統への侵犯……)を支えた最重要な女君である以上、当然の追憶とも言えるのだが、いわばこの追憶こそが先に見た「玉鬘」巻の「あらましかば」と直結するものではないだろうか。外面的な繁榮、栄華を描く「少女」巻を対照的に挟み、「玉鬘」巻で再びこの追憶が焦点化されることで、源氏のもの悲しい内面はさらに浮き彫りになるだろう。そこに「新キャラクター」の登場する必然性も自然、出てくるのであった。

むすびにかえて ——様々な女君を想起する「語り手」

ここまで本稿では、「玉鬘」巻の冒頭表現から、これまでの物語に登場した様々な女君が狙上に上っていることを見てきた。夕顔、末摘花、そして藤壺——。いわば、これまでの『源氏物語』を彩ってきた女性たちをここで光源氏は(そして読者も)総括する。そのなかで「新キャラクター」の登場が期待されてくるのである。そうした総括、期待を呼び起こす表現のひとつひとつが玉鬘

というニューヒロインを招来する「装置」となっているとも言えるだろう。

実は総括をしているのは光源氏だけではない。「夕顔」巻の語り手の一人と目されることがある右近も、様々な女君を想起して、「新キャラクター」の登場を期待させるような働きを担っているのである。

心よくかいひそめたる物に、女君もおぼしたれど、心の内には、故君ものし給はましかば、明石の御方ばかりのおぼえには劣りたまはざらまし、さしも深き御心ざしなかりけるをだに、落としあぶさず、取りしたゝめ給ふ御心長さなりければ、まいて、や事なきつらにこそあらざらめ、この御殿移りの数の内にはまじらひ給ひなまし…… (「玉鬘」④ 16 頁)

もし夕顔様が生きていらっしゃったら明石の君以上に愛されただろう、源氏様はそれほど深い愛情がない女君（末摘花、空蟬のこと）でさえ面倒を見ているのだから、「や事なきつら」（紫の上、秋好中宮のこと）ほどではないにせよ、今回六条院に移った女君（花散里、明石の君）とは同列以上だったはずなのに、と右近は思ったというのだ。

夕顔を思い返す中で様々な女君が登場するという有り様は、これまで見てきた源氏の夕顔懐古と全く同じ流れであり、非常に興味深い。まるで光源氏に歩調を合わせるかのように、さらに源氏が想起しなかった女君（明石の君、空蟬、紫の上など）まで俎上にあげ、この「語り手」はいわば畳みかけていくのだ。来るべき「新キャラクター」の登場に向けて。

これまでの物語、これまでの女君たちを踏まえて、物語は新たな一歩を踏み出す。物語を愛し、かつ身体的な魅力で期せずして光源氏を惑わし、そして光源氏世界を相対化させていく「新キャラクター」玉鬘の登場は、この展開からして自然のものであり、違和感なく受け止められるものとなる。玉鬘の登場の準備は整った。

かくして物語はさらに長編化し、かつ光源氏世界の衰退を描くという新たな段階を迎えた。その前準備を、この「玉鬘」巻の冒頭表現は的確に果たしている。

注

- (1) 武田宗俊「源氏物語の最初の形態（上）（下）」（『文学』18-6,7 1950年6月、7月）
- (2) 池田和臣「玉鬘十帖の成立」（『講座源氏物語の世界』5 有斐閣 1981年）
- (3) 注(2)論文に同じ。
- (4) 日向一雅「玉鬘物語の流離の構造」（『中古文学』43 1989年5月）
- (5) 長谷川政春「〈唐衣〉の女君——末摘花」（『源氏物語講座』2 勉誠社 1991年）
- (6) 原岡文子「末摘花考——靈性・呪性をめぐって」（『日本文学』623 2005年5月）
- (7) 「古風な輝き」というのも突き詰めれば、父親が遺した古い家具、衣装、そして「物語」（『源氏物語』を

相対化し得る先行する物語)であるはずである。

- (8) 太田善之「シャーマンとしての末摘花」(『人物で読む源氏物語 末摘花』 勉誠出版 2005年)
- (9) 吉井美弥子「末摘花——身体・衣・性」(『国文学 解釈と鑑賞』69-8 2004年8月)
- (10) 『新編全集』も『岩波文庫』も、為頼歌を挙げるのみで「本歌」「引き歌」という記載はないので、あるいは参考歌程度の認識かもしれない。ともあれ、現代を代表する両注釈書に挙げられたことで当面、為頼の歌を参観して当該箇所を読むという営みはなされ続けることになっている。